

機関番号：21601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520443

研究課題名（和文） 規範から逸脱した英語表現の語用論的研究—特に従属節の解釈
に関して—研究課題名（英文） Pragmatic Studies in Exceptional English Usage: Interpretation of
Subordinate Clauses

研究代表者

中山 仁 (NAKAYAMA HITOSHI)

福島県立医科大学・看護学部・教授

研究者番号：70259810

研究成果の概要（和文）：文法的に見て不自然でありながら、母語話者によって日常的に用いられる英語表現のうち、従属節を含む表現とその解釈をめぐる問題を取り上げ、語用論的視点から分析を行った。その結果、be動詞に後続し補語位置に生ずる副詞節、独立文となった非制限的關係詞節、および、音調上の区切りを伴わない非制限的關係詞節は、いずれも文脈を背景に一定の語用論的推論を促すことによって適切な解釈を導く表現形式であるということを明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：The studies focus mainly on three types of grammatically exceptional English expression: NP+is+when/where/if clause, independent nonrestrictive relative clauses, and nonrestrictive relative clauses that immediately follow their antecedents without commas or other kinds of boundary. By taking a pragmatic approach to those expressions, it has become clear that they can provide the hearer with appropriate interpretation by prompting the hearer to follow certain inference processes using context information available.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：語彙、意味、語法、語用論、推論、関連性理論

1. 研究開始当初の背景

(1) 学術的背景

Sperber & Wilson (1986, 1995²) の提唱した関連性理論によれば、語用論の目的は、文の文字通りの意味（文の意味）と話し手の意図する意味（話し手の意味）との関係を明ら

かにすることである。現実の発話において、文の意味が直接話し手の意味を表すことはまれであり、通例は文の意味を出発点として、推論を働かせることによって、適切な文脈情報を選択し、最終的にその文の含意すなわち話し手の意味にたどり着くと考える。また、

発話に使用される言語形式は話し手の意味(思考)と完全に一致するのではなく、思考との類似性に基づいて表示されている(ルースに使われている)と見なすことができる。このルース・トークの考え方に従えば、従来、文字通りの意味からの逸脱として例外的に扱われてきたメタファーなどの修辭的表現も、話し手の意味との類似性に基づいて同様の発話解釈プロセスが存在すると仮定することによって説明が可能となる。

(2) 本研究との関連

本研究の着想は上記のルース・トークの考え方に基づいている。すなわち、言語表現には、修辭的表現に限らず例外的な用法が存在する。そのような、文法的に逸脱しているにもかかわらず自然な言語伝達が成立する事例を説明するためには、修辭的表現と同様、話し手の意味と言語表現との間の類似性について分析するのが有効である。

本研究に先立って、研究代表者(中山)は従属節を含む表現の例外的用法について意味的・語用論的研究を進めてきた。たとえば、be動詞に後続し補語位置に生ずる副詞節や、独立文となった非制限的關係詞節を対象としたものである。以上の表現には、それぞれに話し手の意図、文脈情報、聞き手の推論の関与が認められるものの、より詳細な分析の余地が残されている。そこで、本研究ではこれらの従属節を含む英語表現を取り上げ、文法的な従属性に基づく文の意味と、話し手の伝達意図とを結びつける推論のプロセスを明らかにすることを中心的課題として設定することにした。

2. 研究の目的

(1) 概要

本研究は、文法規範から逸脱しているにもかかわらず、母語話者によって日常的に用いられる、いわば例外的な英語表現について、その語用論的意義を明らかにするものである。取り上げる表現は主に英語の従属節に関するもので、具体的には次の3点である。

- ① be動詞に後続する副詞節の意味と機能の問題
- ② 非制限的關係詞節の独立性の問題
- ③ 關係詞節の制限・非制限の形式と意味のずれの問題

分析にあたっては、発話解釈理論の一つである関連性理論に基づくアプローチも念頭に置き、問題となっている従属節のそれぞれについて、発話される際に仮定される話し手の意図と聞き手の解釈プロセスの解明を行なう。これにより、それぞれの従属節の伝達上の効果が浮き彫りになると同時に、言語使用の面におけるこれらの従属節の機能について新知見を得ることが期待できる。

(2) 研究における立場

本研究の目的は、規範から逸脱した表現がなぜ用いられるかを、語用論的視点から、言い換えれば、言語伝達の観点から考察することにある。まずは、これまでの成果を踏まえて、問題となるそれぞれの従属節について、関連性理論に基づいた発話解釈の詳細な分析を行う。その後、全体として、統語上・意味上従属的な立場にあるこれらの節が、伝達上はどのような発話意図を持つようになるのか、従属性の概念はどのように変容するのかなどについて検討する。また、關係詞や従属接続詞などの接続機能を持つ語句が伝達上どのような役割を果たすかについても検討を加える。その際、特に、それらの語句が持ち合わせるとされる概念的意味と手続き的意味(の存在の有無)についても考察を試みる。さらに、これらの表現の修辭的(創造的)側面についても検討する。

(3) 学術的特色と意義

本研究の特色は、第1に、近年発展が著しい関連性理論を念頭に置いた語用論を展開することにある。特に、ルース・トークの考え方を、規範から逸脱した表現の解釈に適用する点は独創的と言える。これは今回取り上げる従属節の場合に限らず、その他の逸脱した表現への適用も期待できる。この研究によって、関連性理論によるより複雑な言語使用の分野への適用範囲を拡大し、理論の妥当性を高めると同時に、豊富な具体例を通して、時に難解な印象を与えるこの理論に対し、正当な理解を得るための貢献ができると思われる。

第2に、本研究は語法と語用論の接点を研究するための方法論を提示するという点で、語法研究と語用論研究の双方の発展にも役立つ。簡単に言えば、断片的な語法情報を語用論的視点から考察することによって、その情報を単に記述するだけでなく、その語法の根拠をより明確にし、存在意義を示すのに役立つという点で意義深い。

第3に、規範から逸脱した英語表現を扱うこと自体にも意義がある。まず、英語学習者にとって、このような例外的な事象を認識することは重要である。実は、規範から逸脱した表現は日常的に(意外にも)多く見られ、しかも、それらが英語母語話者によって「逸脱」と認識されていない場合も多い。ここに英語学習者と母語話者との間の認識のずれが生じていると考えられる。例外的な表現の理解は母語話者の言語直観にさらに踏み込むことのできる貴重な証拠であり、これらの表現が使用される際の表現意図を明らかにすることは、英語学習者の認識を新たにするのに有益であると思われる。

3. 研究の方法

(1) 概要

まず、be 動詞に後続する副詞節の意味と機能の問題について、これまで行なってきた「主語+be 動詞+when/where 節」におけるwhen/where 節の語用論的分析に加え、新たにif 節も考察の対象とし、関連性理論のより広範な現象への適用を試みる。第2に、独立文となった非制限的關係詞節の語法に注目し、通常非制限的關係詞節との違いについて、関連性理論に基づいた詳細な分析をさらに進める。第3に、関係詞節の制限・非制限を区別する形式と意味のずれに関わる表現について扱う。ここでは非制限的關係詞節の例外的用法と思われる現象についてのこれまでの検討をもとに、制限・非制限という統語的・意味的区別が話し手の認識とどのように関わるかについてさらに詳細な分析を行なう。

(2) 研究計画

①be 動詞に後続する副詞節の意味と機能の広範囲な検討を行う。これまでに対象とした構文は以下のようなものである。

Frustration is when you can't find the car keys.

これは定義文の一種で、定義される(時と直接関係のない)語句が時を表す副詞節によって定義されるという、ある意味不自然な(したがって規範から逸脱していると考えられてきた)表現である。これについて、中山は先行研究において「when 節の発話に基づいて聞き手が推論を働かせた結果、意図された意味に到達する」という関連性理論に沿った考えを当てはめることが妥当であることを示した。これを受けて、未着手の状態にある補語位置に生じるif 節に関するも検討に加え、関連性理論に基づくさらに詳細な分析を行なう。

②非制限的關係詞節、特に、以下に示すような、独立文となった非制限的關係詞節に関する語用論的考察を行う。

She's borrowed a history book. Which suggests her teacher is having some influence on her.

これに関しては、中山の先行研究において「独立關係節の生起に関する語用論の原則」を仮定した。それは、「独立關係節は、先行発話の発話時点において、その発話(の一部)をきっかけに、新たな想定が生じた場合に生じやすい。その際、独立關係節は『その想定が生じたことの明示化』、あるいは『その想定具現化』、『その想定強化・削除』を行なうことによって、認知環境の改善に貢献する」というものである。また、中山は他の

代名詞との比較を通して、独立關係節における関係詞の手續きの意味についても若干の考察を行った。そこで、本研究では上記の語用論の原則を精密化するための検討を行なう。これには関係詞が合わせもつと考えられる概念的意味と手續きの意味の関係を明らかにすることが必要と思われる。また、他の代名詞や語用論的文連結詞との比較検討も含めて、それらとの特徴の相違を明確にする。

③關係詞節の制限・非制限を区別する形式と意味のずれに関わる表現について扱う。対象となるのは以下のような例である。

a. *During the late 1770s Thornton married Elizabeth Pritchard, the daughter of a provincial theatre manager. They had two sons who died young and three daughters.* (BNC Online)

b. *It was the following Tuesday before Joanna Grey's report arrived at the Tirpits Ufer. Hofer had put a red flag out for it. He took it straight in to Radl who opened it and examined the contents.* (J. Higgins, *The Eagle Has Landed*)

(a)の下線部は一見制限的關係詞節のように思えるが、たとえ前後の記述内容を見ても、「息子は2人しかいなかった」としか解釈できないという点で非制限的である。しかも、その解釈で発話されても主節と關係節の間に音調上の切れ目は生じないのが普通である。また、(b)は非制限的關係詞節に特徴的な固有名詞(Radl)を先行詞とする場合であるが、後続する關係詞節との間にコンマ(comma)は介在していない。これを作者の単なる誤用と見なすことはできない。なぜなら、同小説内には同様の例が他にも多数認められ、それと同時に、コンマを使用した「通常の」非制限的關係詞節も見られるからである。

これについて、中山は先行研究において1つの語用論上の原則、すなわち「非制限的關係詞節が、文脈あるいは主節の情報に基づき、必然的帰結、または、聞き手(読み手)にとって予測可能な情報であると話し手が意図している場合、關係詞節は主節に直接後続する」という原則を仮定した。これにより、これまで例外的に見なされてきた、あるいは曖昧な解釈がなされてきた關係詞節に対してより明確な説明を与えることを可能とするだけでなく、制限的であると当然視されてきた表現についても非制限的解釈の可能性を認識させることによって、より適切な文(発話)の理解が得られることを明らかにした。

これを踏まえて、本研究では、さらに多くの具体例を収集すると同時に、主節の語用論的含意、文脈情報に基づいて、いかなる推論

プロセスを経て話し手の意図に到達するかについて、具体的な検討を行なう。

以上、3つのタイプの英語表現に関して得られた発話解釈上の特徴をまとめ、従属節の語用論上の機能としての一般化を図る。

4. 研究成果

(1)「NP+be+副詞節」の形式における副詞節の意味と機能について検討を行った。このうち、定義文として用いられる「NP+be+when/where 節」についてはコーパスに基づくより詳細な分析を行った。同時に、定義文と関連して、*Longman Dictionary of Contemporary English* (4th ed.) におけるwhen 節を用いた定義の使用状況についても調査を行った。

その結果、従来の語法書では不相当であると見なされてきた上記の表現が、実際には自然に用いられるものであることがより明らかとなった。また、*LDOCE*⁴を対象とした調査結果においても同様の特徴が見られた。これらの結果には、話し手(書き手)の意図を効率的に伝達することに貢献するという語用論的な理由が関連しているものと思われる。

また、同様の発話解釈過程を、文法上不完全な印象を与える「NP+be+if 節」(例: *The only way his role can be clarified and his position made tenable again is if there's a public inquiry.*) についても適用し、説明を試みた。その結果、この表現は「if 節で表される条件は、主語 NP の成立条件である」という推論を聞き手に促す表現として捉えることができる、という結論に達した。この表現も、when/where 節の場合と同様、語法上の一般的認識と使用実態との間に隔たりのある例であり、そこに同種の語用論的要因が関与していることを示すことができた。

さらに、NP+be+if 節については、the only N is if 節の生起状況とNの語彙的特徴をコーパスに基づいて分析を行った。この成果は、擬似分裂文の一種として解釈する従来の統語的・意味的視点に加えて、語用論的解釈の関わりを明らかにできた点で意義深い。

(2) 独立文となった非制限的關係詞節の語用論的特徴の検討と、關係詞節の制限・非制限を区別する形式と意味のずれに関する検討は、最終的に主節と關係詞節の連結に関する一般化のための仮説の中で統一的に捉えることが可能となった。

独立文となった非制限的關係詞節は、独立文であるがゆえに、主節とは別個の発話単位を成す。言い換えれば、主節と關係詞節との節連結の緊密度は低い。このことは、話し手の意図が関与する度合が相対的に高いことを

意味する。具体的には、先行発話を受けて文脈と聞き手(先行発話の発話者と同一である場合もある)の想定から新たな想定となって關係詞節が導かれているという点が特徴的である。

これに対し、実際には非制限的でありながら、一見制限節のように見える關係詞節、すなわち、主節と關係詞節との間に音調上の切れ目が存在しない關係詞節は、同一の発話単位を成しており、節連結の緊密度は高いと予測される。ただし、この關係詞節は非制限的(非限定的)であるので、通常の制限的關係詞節と同じ形で緊密性を保っているとは適当ではない。

その生起要因について意味的・語用論的観点からさらなる検討を加えた結果、特に小説においては、一定の語用論的要因によって非制限的關係詞節が制限的な形式をとることがしばしばあるということが分かった。具体的な要因としては、關係詞節が、①主節を述べるにあたり、欠かせない理由であること、②主節の情報を補完すること、③主節と關係詞節との間に(意味上あるいは文脈上)必然性や予測可能性の關係が意識されること、などが関与している。言い換えれば、「話し手にとって關係詞節が伝達の中心であると意識されているか」という点が重要な要素となっている。

このように、独立した非制限的關係詞節と主節に直接連結した非制限的關係詞節は、文脈と話し手の意図に対する依存度の相対的な差異に基づいて語用論的に説明することができた。いずれの場合も、文脈と話し手の意図の関与が認められる点で共通するが、独立文の場合は関与が許される話し手の想定幅がより大きく、先行文脈情報に対する重要性の意識は低い。一方、直接連結した非制限節の場合は話し手の想定幅がより小さく、先行文脈情報に依存する度合いが高いと言える。

以上の結果は(特に主節に直接連結した非制限節の分析は)、制限節・非制限節の違いを、区切りの有無という形式に依存して考えがちな従来の解釈手順にも新たな視点を与えると同時に、關係詞節の再分類の必要性も促すこととなった。そこで、意味的・語用論的視点から、關係詞節のタイプを(制限・非制限の二分法とは異なる形で)細分化し、細分化されたそれぞれの範疇同士の關係を連続性(段階性)の観点から捉えることができないか検討を行った。

検討の結果、關係詞節は主節との意味論的・語用論的關係に基づいて、「(狭義の)制限的關係詞節」、「記述的關係詞節」、そして、「(従来の)継続的關係詞節」の3つに分

類できることを示した。さらに、このうちの記述的關係詞節は、主節との意味上・語用論上の緊密度に応じて「中心的關係詞節」と「周辺の關係詞節」とに下位区分されると提案した。この「意味上・語用論上の緊密度」の概念は、分類上それらの上位にある継続的關係詞節にもかかわっており（特に予測可能性の概念）、關係詞節の解釈を考える上で、全体として重要な概念となることを示すことができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計3件）

①中山 仁、コンマを伴わない非制限的關係詞節に関する意味的・語用論的考察、英語表現研究、査読有、25号、2010、15～26ページ

②中山 仁、「例外的」NP is when/where 節および NP is if 節の用法と意味、福島県立医科大学看護学部紀要、査読有、12号、2010、1～9ページ

③中山 仁、定義文に用いられる when/where 節の用法と解釈プロセス、英語語法文法研究、査読有、15号、2008、108～123ページ

〔学会発表〕（計3件）

①中山 仁、關係詞節の形と意味—非制限的關係詞節の接続形式と解釈、第30回筑波英語教育学会、2010年6月26日、つくば

②中山 仁、気になる關係詞節—制限節と非制限節の形と意味、第5回英語語法文法セミナー、2009年8月7日、大阪

③中山 仁、「例外的」用法の辞書記述—which 節および when/if 節に関して、第31回英語コーパス学会、2008年4月26日、寝屋川

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中山 仁 (NAKAYAMA HITOSHI)
福島県立医科大学・看護学部・教授
研究者番号：70259810

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし